まえがき

天つ真清水（あまましみず）　ながれきて
あまねく世をぞ　うるおせる
ながく　かわきし　わが魂も
くみて　いのちに　かえりけり

インド四千年の宗教思想史には、数えきれないほどの、聖者（ムニ）、覚者（ブッダ）、哲学者（ジュニャーニ）が現れ、ヒマラヤ山脈のような壮観さで世界を圧倒している。そして、その山なみのなかで、ひときわ高くそびえる三大巨峰は――、

ゴータマ仏陀（ブッダ）（おしゃかさま）
シャンカラ大師（アチャリヤ）（ヴェーダーンタ哲学を大成した人）
ラーマクリシュナ大覚者（パラマハンサ）（一八三六―八六）

である。

先に紹介した詩は、私の大好きな讃美歌の一節だが、ラーマクリシュナの言行録、『不滅の言葉』は私にとってまさに、天つ真清水――観音の甘露の法雨そのものだった。人生や宗教に対するさまざまな疑問や不安が、真理の太陽をあびて、あとかたなく消え去ったからである。

さきの詩のなかの、〝普遍的〟という言葉が肝心なのである。ラーマクリシュナの思想は、アジアだけの光ではない。白色人種だけの光ではない。一宗教だけの光ではない。普遍的福音なのだ。彼の精神はヒンドゥー教徒としての、純粋熱烈な信仰と修行を通して、ついに宇宙の大原理――一なる真理を体得り、××教という建物の屋根を突き破って、大宇宙に輝きわたったのである。

彼と話をしたイスラム教徒は、「ラーマクリシュナはイスラム教の聖者だ」と言う。クリスチャンは、「ラーマクリシュナはキリスト教の聖人だ」と言う。ヒンドゥー教のなかの各派の信者たちはみな、「ラーマクリシュナは私と同じ宗派の大覚者だ」と言う。そして、それぞれに自分の信仰を深め、浄めていった。古今東西、こんな〝宗教家〟があっただろうか？　私は聞いたことがない（仏教についていえば、インドでは仏教はヒンドゥー教の一派とみなされている）。

何故、こんなにたくさんの宗教宗派があり、おのおのが、「この道だけが正しい。他の道は間違っている」と言いあっているのか、私は若いころから不思議だった。どれも信用できない

気がした。

『不滅の言葉』は答える――真理は一。神は一。――一なる神が、民族や宗教のちがいによって、さまざまな名で呼ばれている。ゴッド。アッラー。大日如来。天御中主神。――各宗教の教義が、真理に到るさまざまな道だ。きれいで楽な道もあるし、危険いっぱいの道もある。表参道。裏参道。近道。まわり道。いろいろだ。

「道は無限にある。一人一人でちがうからだ。理解能力と、性格によって人は自分の道をえらぶ。他人の道を悪く言ってはいけない。まじめに登ってさえいれば(真理を求めて努力していれば)、どの道でも必ず頂上に着くのだから」

神は存在するとか、しないとか――そんなことはラーマクリシュナにとって問題にもならない。

――「わたしは、今あんたと会って話をしているのと同じように、神さまに会って話をするんだよ。年中、つきあっているんだよ」

〝五歳の子供のように〟天真爛漫な大覚者は、来る人は誰にでも会った。相手の社会的地位、宗教のちがい、学歴、年齢の別なく、誰に対しても親しい友人のように接した。純粋で正直な人、信仰深い人を愛し、勘定高い人やウソツキを極端に嫌った。『不滅の言葉』五巻は、インド精神文化の精華といわれている。

この世にはいろいろな霊的階層の人々がいるので、大小高低さまざまな宗教団体が活動している。小学生にとっては小学校が最善なのだが、どんな学校でも、そこで学んで卒業するためにあるのだ。

ラーマクリシュナの口ぐせの一つは、「前進せよ」である。一度や二度の神秘経験で、いい気になっているなど、とんでもないことで、途中のバス停留所を目的地と思いこんで腰をおちつけてはいけない。『不滅の言葉』は、相対世界を卒業させるための書物だと私は感じている。やさしい言葉で、ユーモアと笑いに満ちた会話は、当時のインドのいきいきとした社会描写と共に、読む人をあきさせないが、時おり、どぎもを抜かれる。

生きものにとって、人間として生まれることは真に貴重なこと。そして人生の目的は唯一つ——神を知ること。神に近づく努力をすること。名誉だの財産だのという幻を追い求めて、いたずらにエネルギーを消耗するな。この偉大な教師は、くりかえし、くりかえし、人びとに向かって語っている——。

日本で最初にラーマクリシュナを紹介したのは、昭和十九年三月発刊された文部省の『民族研究所紀要・第一冊』である。インド学、仏教学の世界的権威である故・渡辺照宏博士が三十七歳のとき、『ラーマクリシュナの生涯とその宗教運動』という論文を、ここに発表された。

日本の考え方だけが正しいと教えこまれた私たちは、いつ終わるとも知れぬ泥沼のような戦争の最中で、皆が命からがら生きていた時代なので、この普遍的福音に関心をよせた人は、おそらく、僅かだったことと思う。宗教にことのほか興味を持っていた私も、そのことは夢にも知らず、動員学徒として、「花もツボミの若ざくら……」と動員学徒の歌を友だちと途中合唱しながら、学校の寮から川崎の住友通信（現在の日本電気）に毎日働きに通っていたのである。

やがて終戦とともに学校を中退して旭川市に帰り、親のすすめるままに結婚して二児をもうけた。家事育児が不得手な私にとって、それからの数年間はまさに悪戦苦闘の連続だった。昭和二十九年長男が学齢期に近づいたので、親たちとも相談の末、学校の近くに家を買って、東京に移り住む。下の子供が小学校に入るのといっしょに、私は学生時代に一番好きだった英語の勉強をはじめた。二、三年たつと気移りがして、中国語やロシヤ語、エスペラントなどの講座を次々にまわって歩いていたところ、『生きる秘訣』（日本教文社刊）という本にめぐりあい、これが私の人生の転機になった。

この、ヴィヴェーカーナンダの講演集の内容に、魂をゆり動かされ、本のとりもつ縁で、渋谷の神泉町にあった、東京ラーマクリシュナ・ヴェーダーンタ協会に行き、ヴィヴェーカーナンダの師がラーマクリシュナという人であることを初めて知ったのである。そして、その会の手伝いを一年ほどしているうちに、渡辺照宏博士にお目にかかる機会に恵まれたのだった。

先生は、ラーマクリシュナの真実の姿を見るためには英訳の本では不十分だから、ベンガル語の『不滅の言葉』を読むように、とすすめて下さって、ご病気にもかかわらず、この中年の主婦に、根気よくベンガル語の手ほどきをして下さったのである。後にはヒンディー語やサンスクリットも教えていただいた。読みたい一心に、偉い先生に直接教えていただける嬉しさが加わり、大胆にも原典五巻の翻訳にとりつき、ついにこれが私のライフワークになった。昭和四十四年のこと。

照宏先生のご病気が重くなり、入院なさってからは、東京外国語大学の奈良毅教授のお宅に時どき通って教えていただき、勉強を続けた。一通り読んで大学ノート二十四冊に訳を書きあげたところで、ごく一部を抄訳本として小さな本にまとめ、昭和四十九年春、自費出版をした。これが思いがけなく反響が大きく、多くの読者のかたがたから、「こんなすばらしい聖者がいたことを初めて知った。この人の素姓や修行のことについて、ぜひ詳しく知りたい」という電話や手紙が相ついで来たので、照宏先生にご相談申し上げたところ、昔書いた論文があるから、それを参考にして、その当時は入手できなかった『大師ラーマクリシュナ』（伝記の決定版、英文。直弟子スワミ・サラダーナンダ著）と、『不滅の言葉』の内容を加えて、あまり長くなく読みやすい伝記を作っては、とご教示下さった。

書きはじめたのは昭和五十一年だったけれど、翌五十二年には先生がご他界になり、また私も

次つぎと家庭の事情に追われて、おくれていましたのが、このほど、三学出版の増田五郎氏のご協力により、出版のはこびとなり、恩師、照宏先生の御霊前へ何よりの供養と思い、心から喜んでおります。また、私のような者に、こんな尊い仕事を授けて下さった神仏の恩、師の恩、周囲の人びとの恩に、心底から感謝し、合掌します。

昭和五十五年五月十五日

田中嫺玉